

我々6月21日(火)

第3種郵便物認可

七月一日は童謡の日。
昭和五十九年、日本童謡協会がこの日を制定宣言してから満十年になる。

「童謡」という語が日本の社会に根づいたのは、大正七年七月一日、鈴木三重吉らによって創刊された児童文芸雑誌

「赤い鳥」の童謡運動からで、子どもの文化の源流となった日を記念したものである。

「赤い鳥」の童謡運動は、北原白秋を中心に、当時極めて教育的であった小学唱歌に代わる、子どもたちの新童謡を創作提供する

ことを第一の目的とし、時々の権勢に歯向かった。

白秋も毎月の誌上に創作童謡を発表、三百二十八篇にも及んだ。成田為三、中山晋平などの作曲者も呼応して名童謡勃興(はつこう)が図られた。

「赤い鳥」のもう一つの運動は、全国の子どもたちから自由な作品を募って「子どもの自己表現を開拓しよう」という活動だった。当時の自由教育思潮と相

俟(まち)って、文学へ情熱を燃やす若い小学校の先生方がこの活動を支え、山梨、長野、茨城などの先生が個々の課外活動で口火を切り、文部省の指導の姿勢に

「赤い鳥」創刊号の表紙(大正7年)



赤い鳥

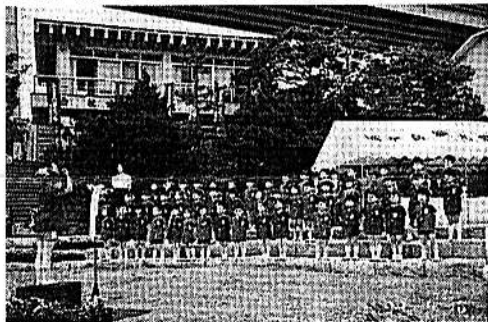
「童謡の日」

「赤い鳥」運動と神奈川の子どもたち

かかわらず全国規模に広まっていた。

白秋が、応募されてくる作品の選の模様を「全国からの参加校三百二十校を越え、毎月二十人以上の詩を応募した」と述べていることでもわかる。

神奈川の初登場は、大正八年四月号、中郡旭村の眞壁勝治「ねんね草」と早かは、神奈川の学校の先生の指導による活動は、大正十年六月号からの横浜市青木小学



白秋碑の前で童謡を歌う城ヶ島保育園の園児

校。大正十二年からは三浦。ちなみに、彼らの樹立した金学塔は、



野上 飛雲

入選作品上位校
三崎小学校 一八八篇
川尻小学校 一四六篇
下野谷小学校 四六篇
青木小学校 二八篇
脇心小学校 二四篇
入選個人別上位者
山下 あさ(川尻小) 二三四篇
田中 光(同) 二二篇

八十歳を超した当時の学童詩人たちによると、三崎小学校の木村直治、内海延吉、川尻小学校の村松八郎、青木小学校の小野等々の先生方の名が回顧されてくる。

ここに、村松八郎先生は津久井郡の脇心小学校から川尻小へ。さらに横浜市の潮田小、下野谷小と転じ、各勤務校の子どもたちを「赤い鳥」の花園で活躍させている。神奈川の童謡運動史に遺(のこ)る一人で、川尻小学校時代の山下あさ、八木やすの二人は「良寛さんのような先生」と追慕している。

大正の童謡勃興期に、神奈川の子どもたちと先生方が「赤い鳥」の誌上に築き上げた金学塔の輝きを「童謡の日」に称(たた)えた。新しい童謡おこしのためにも。

(三崎白秋会長)